

「with コロナ時代における献血のあり方について」議事録

(開催要領)

1. 開催日時：令和2年11月22日(日)13:00～15:00
2. 場 所：大分センチュリーホテル
3. 登壇者：
厚生労働省 医薬・生活衛生局血液対策課長 中谷祐貴子
大分県福祉保健部薬務室長 北村浩一
大分県合同輸血療法委員会委員長・大分大学医学部附属病院輸血部長 緒方正男
大分県赤十字血液センター 献血推進課長 毛利英明
輸血経験者 山下篤
日本文理大学医療専門学校2年生 中村祐貴

(プログラム)

1. 開会挨拶 中谷祐貴子、北村浩一
2. 講演①「献血が支える医療～献血の現状とその重要性について～」緒方正男
3. 講演②「献血時のコロナ対策と血液確保の取り組み」毛利英明
4. 講演③「輸血体験」山下篤
5. 講演④「学生ボランティアの活動内容」
6. パネルディスカッション
ファシリテーター 中谷祐貴子
パネリスト 北村浩一／緒方正男／毛利英明／山下篤／中村祐貴
7. 閉会挨拶 中谷祐貴子

* 敬称略・順不同

司会：

こんにちは。全国の皆さん、元気にしちよーかえ。「未来に向けて 知る・変わる・守る チームNEXT ステップ」シンポジウムをご視聴いただきありがとうございます。この時間は、「with コロナ時代における献血のあり方」と題して、ここ大分県の大分センチュリーホテルからインターネット配信によるオンラインシンポジウムをライブでお送りしていきます。私は本日の進行を務めさせていただきます大分放送アナウンサーの海原みどりと申します。どうぞよろしく願いいたします。なお、新型コロナウイルス感染症防止の観点から、一部の出演者の方にはリモートでご登壇いただきます。どうぞご了承ください。

本日は「with コロナ時代における献血のあり方」をテーマに、「献血ってどうして必要なんだろう？」という疑問に対して、有識者や輸血経験者、学生ボランティアの皆さんの視点

から紹介していただきます。本日のシンポジウムを通して、視聴されている皆さんが献血の重要性や with コロナ時代での取り組みを知っていただくきっかけとなればと思っています。

それでは本日のプログラムをご紹介します。まずは開会のご挨拶を、厚生労働省、医薬・生活衛生局血液対策課長、中谷祐貴子、そして大分県福祉保健部薬務室長、北村浩一様よりいただきます。その後、「献血の現状とその重要性について」、大分県合同輸血療法委員会委員長を務められる大分大学医学部門講師、大分大学医学部付属病院血液内科診療教授、大分大学医学部付属病院輸血部長の緒方正男様よりご紹介いただきます。続いて、「大分県内におけるコロナ対策と各地の取り組み」を、大分県赤十字血液センター、献血推進課長、毛利英明様よりご紹介いただきます。その後、実際に輸血体験をされました山下篤さんより、ご自身の輸血経験についてご講演いただきます。その後は、「学生ボランティアとしての活動内容」を、大分県学生献血推進協議会で会長を務める日本文理大学医療専門学校2年生、中村祐貴さんよりご紹介いただきます。その後、ご講演した皆さんによるパネルディスカッションを行います。それぞれの立場からの視点で、お話しいただきます。ぜひ最後までご視聴ください。それでは初めに、厚生労働省、医薬・生活衛生局血液対策課長、中谷祐貴子より、開会のご挨拶を申し上げます。なお中谷さんは、本日東京からのリモートでのご登壇になります。中谷さん、よろしく願いいたします。

1. 開会挨拶

中谷：

皆さん、こんにちは。厚生労働省、血液対策課長の中谷でございます。本日はこのシンポジウムにお集まり、またはご視聴いただきまして、誠にありがとうございます。また本日お集まりの皆様におかれましては、日頃から献血の推進に多大なご尽力をいただきまして、厚く御礼申し上げます。

さて、皆様ご承知のように、わが国では輸血などに用いる血液製剤は、国民の皆様の善意の献血により支えられております。またその結果として、血液製剤を必要とする多くの患者様の命が日々救われております。一方で少子高齢化の進展によって、近年20代、30代の若い世代の献血者が減少傾向にあります。このため将来にわたり血液製剤を安定的に供給することが難しくなる恐れがあります。このため国民の皆様、特に若い世代の皆様には、一層献血にご協力をお願いしていかなければならない状況でございます。

また現在、新型コロナウイルス感染症が流行しておりますが、この流行の初期のときには、献血血液の確保が困難な状況に陥りました。その際、厚生労働省では地方自治体に対して、献血事業の推進へのご協力をお願いするとともに、4月の緊急事態宣言が行われた際には、日本赤十字社が緊急事態宣言下にあっても、事業の継続が必要な事業者であるということ、改めて周知させていただきました。こうした取り組みにより、また自治体、日本赤十字社献血にご協力をいただきました多くの皆様のお力によりまして、なんとか必要な献血血液を確保することができました。本日は新型コロナウイルス感染症流行下においても、先進

的な取り組みを行っていただいている大分県で、このシンポジウムを開催させていただきました。本日は皆様と「with コロナ時代における献血のあり方」について、意見交換できるのを楽しみにしております。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

司会：

中谷さん、ありがとうございました。続きまして、大分県福祉保健部薬務室長の北村浩一様より、ご挨拶をいただきます。北村様、よろしくお願いいたします。

北村：

皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました大分県福祉保健部薬務室長の北村でございます。開会にあたり、ご挨拶いたします。まず本県の献血の状況でございますが、令和元年度は県人口の4.17%にあたる4万8,391人の方にご協力をいただきました。これは前年度より2,286人増加しており、献血率も全国12位から9位に上昇しております。この貴重な血液を県民の医療のために提供できたことは、ひとえに県民の皆様の善意の賜物であり、深く感謝申し上げます。しかしながら10代から30代の若年層の献血者人口は減少しており、若年層献血基盤の確立が大きな課題となっております。

こうしたことを受け、県では成人を迎える若者を中心に、献血への理解と協力を呼びかける「はたちの献血」キャンペーンや、高校生自らが学校内外で献血の啓発活動を行う高校生献血の輪拡大推進事業、また県内の大学等の学生からなる大分県学生献血推進協議会への業務委託などを通じて、将来の献血を担う若者に献血の重要性を伝える啓発活動を行っています。また大分県赤十字血液センターにおきましては、高校卒業時期に献血のきっかけをつくってもらう卒業献血キャンペーンや、献血思想を普及するための講話、献血セミナーの活用を学校などに呼び掛けているところです。

一方、血液製剤の使用につきましては、平成23年に設置した大分県合同輸血療法委員会において、医療機関相互の情報交換や研修会を実施して、皆様からいただいた善意の血液が安全かつ適正に使用されるよう努めているところです。しかしながら今年度は、新型コロナウイルス感染症の発生を受け、感染拡大を防止する観点から、各種イベントの中止、企業等におきましては、テレワーク、時差出勤などが実施されておりますことから、これらの影響により企業等で実施予定の献血が中止になるなどの影響が出ていて、安定的な献血確保に影響が生じております。このため大分県赤十字血液センターでは、安心して献血していただけるよう、問診等のバス外での実施、それからバスでの仕切りの設置、献血バスの予約運用の導入と、3密対策の徹底により感染防止に向けた体制を構築しているところでございます。

県民の皆様にはこのような状況と併せまして、血液事業の重要性をご理解いただき、引き続き安定的な献血確保のご協力をいただきますようお願い申し上げます。開会にあたってのご挨拶といたします。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

司会：

北村様、ありがとうございました。ここで「with コロナ時代における献血のあり方」について、映像でご紹介いたします。ご覧ください。

「with コロナ時代における献血のあり方」について、映像でご紹介いたしました。さてここからは、それぞれの立場の視点からご講演いただきます。それでは初めに、大分県合同輸血療法委員会の委員長を務められます大分大学医学部門講師、大分大学医学部附属病院血液内科診療教授、大分大学医学部附属病院輸血部長の緒方正男様より、「献血が支える医療～献血の現状とその重要性について～」、ご講演いただきます。緒方様、よろしくお願いいたします。

2. 講演①

緒方：

ご紹介ありがとうございます。また今回このような機会をいただきまして、大変ありがとうございます。ご紹介いただきました大分大学附属病院の血液内科と輸血部に所属しています緒方です。私は輸血を使用しているほうの立場ですので、そちらの立場から献血がいかに医療を支えているのか、その重要性についてお話をしていきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

まず献血でいただいた血液が患者さんに届くまでの流れについて、簡単に示します。国内で患者さんが受ける輸血製剤の100%が献血由来です。献血は献血ルーム、あるいは献血バスなどで行われます。献血いただいた血液は血液センターに送られまして、血液型や感染症などの検査を行い、血液の成分ごとに分けて製剤、保管されます。保管された輸血製剤は医療機関からの要請に応じて供給が行われ、患者さんのもとに届けられます。

この患者さんのもとに届けられる輸血製剤の種類と主な目的について、見てみたいと思います。通常行われる献血である全血献血、いわゆる400ml献血、200ml献血では、献血いただいた全血製剤は遠心分離されまして、赤血球、血小板、血漿に分けられます。また成分献血という方法も行われていますが、大分では献血ルーム「わったん」で行われています。この方法ではより多くの血小板、血漿を得ることができます。

このように輸血療法においては、成分に分けられて、患者さんが必要とする成分だけを輸血する、いわゆる成分輸血という方法が通常行われます。赤血球は貧血をきたしたり、出血をきたしたりした場合に投与されます。血小板というのは、血液を止めるための血球成分です。血小板が減少しているような患者さん、その多くは血液疾患なわけですが、そのような患者さんに投与が行われます。また新鮮凍結血漿というのは、遠心分離したときにできる上澄みである血漿を凍結保存したものです。血漿中に含まれる、血液を固めるためのタンパクである凝固因子というのが低下した患者さんにおいて、これを補うために投与が行われま

す。

なおこの輸血製剤は、使用期限があります。献血からの有効期間は、赤血球は21日、血小板にあたってはわずか4日間とされています。このように輸血製剤は長期間保存を行うことができず、たくさん前もって作り置いておくことができません。このため必要としている患者さんに的確に輸血製剤を届けるためには、毎日新しい血液が必要となります。このため、日々の献血が重要となっていくわけです。

これら輸血製剤がどのような使用状況で、診療科で使われているのかについて示したいと思います。赤血球については、血液内科で多く使用されていますが、その他さまざまな診療科で使用されています。ちょっと字が小さくて見えないと思いますが、申し訳ありません。こちらは消化器外科、整形外科、心臓血管外科、これは主に手術による出血に対して使用されます。ここは消化器内科ですが、これは例えば胃や腸から出血をきたしている患者さんに対して、その対処として投与が行われます。ここに見られるのは救命救急科ですが、外傷、けがなどによる出血に対して使用が行われます。また血漿製剤は大量の出血をきたすような状況で使用される場合が多く、心臓血管外科や救急科で多く使用される傾向があります。血小板はその多く、3分の2ぐらいが血液内科で使用されています。

このように血液内科では非常に多くの輸血製剤を使用するわけですが、これが実際にどのような状況で使用されているのか、具体的に示したいと思います。この患者さんは私たちの診療科で治療を行った患者さんですが、20代、急性骨髄性白血病の患者さんです。白血病では発症時、骨髄という決まったスペースの中に白血病細胞、がん細胞が増えてきます。そうすると正常の造血が障害されますので、患者さんは発症時より貧血、血小板減少をきたしています。この状態で患者さんはがん細胞をやっつけるために、強力な抗がん剤治療を受けます。そうするとがん細胞は確かに減るわけですが、ただでさえ弱っている正常造血は一時的にさらに障害を受けます。このため正常白血球はゼロ近くとなりますので、この間患者さんは無菌室で治療を行うこととなります。また赤血球、血小板輸血が頻回に必要となります。この間患者さんは血小板輸血が届かなければ、脳出血を起こすかもしれない。赤血球輸血を行わなければ、ふらふらして立てなくなるかもしれない。このような状況下で無菌室で治療を行っています。がん細胞が減れば、正常造血が回復できるスペースが骨髄の中にできてきますので、順調に行った場合、抗がん剤治療から3、4週間でこのように正常造血が回復してきます。血小板が増えてきたりします。そして骨髄を確認し、白血病細胞が消えた、いわゆる完全寛解を確認して、引き続いて治癒を目指して治療を繰り返していくというように行っていきます。このような期間、患者さんは無菌室の中で抗がん剤の副作用と死の恐怖と戦いながら日々過ごされています。このような患者さんにとって輸血療法というのは、無事に明日を迎えるためになくてはならないものであると思います。

また骨髄移植という治療法について聞かれたことがある方もおられると思いますが、これは化学療法で治すことが難しいような状態の血液疾患の患者さんに対して、治癒を目指すための非常に過酷な治療法です。正常造血もろともがん細胞をやっつけてしまうような、

強力な抗がん剤などで前処置を行い、引き続いて他人より得られた骨髄を移植、輸注します。さまざまな合併症をきたす場合が多く、そのような場合には正常血球の回復が遅れる場合があります。この患者さんは化学療法で治すことが、残念ながらできなかった白血病の患者さんであり、骨髄バンクを介した骨髄移植を行いました。移植後、さまざまなウイルス感染症を繰り返し、そのために血液の回復が遅れ、この患者さんは4、5ヶ月間にわたって、赤血球、血小板輸血が必要でした。最終的に赤血球輸血は12回、血小板輸血は30回必要としています。患者さんはこの危険な時期を、輸血を行うことによって、乗り切ることができました。なおこの患者さんは、この移植から4、5年となりますが、現在全く元気になられまして、社会復帰されています。先ほどの白血病の患者さんも、今は病気を克服されています。このように病気の克服に、血液疾患の治療に輸血製剤はなくてはならないものであると言えます。

また輸血が救命に直結する分野として、外傷などによる大量出血があります。当院での大量出血に対する対応状況について見てみました。3カ月間という調査期間を設けて、この期間に高度救命救急センターで大量輸血プロトコールを行った患者さんを確認すると17名でした。これらの患者さんは、ほとんどがドクターヘリで来られています。ドクターヘリによって、大分県内、ほぼ20分で搬送することが可能となっております。患者さんの病態としては、交通外傷あるいは転落などが多くを占めており、来られたときの血圧は非常に低下している患者さんが多いという、いわゆる出血性ショック、ショック、危険な状態で到着しています。

出血性ショックをきたした場合、30分以内に患者さんの過半数が死亡するという報告もあります。このような患者さんを救命するための絶対条件は、ただちに大量輸血を行い、これを患者さんの状態が落ち着くまでひたすら繰り返していくということです。

これら17名における輸血状況について確認してみました。そうすると赤血球輸血は、使用した17人の中央値、平均のようなものですが、16単位。これは400ml献血の8回分に相当します。また血漿製剤、血小板も多くの患者さんでたくさん使用されていました。20単位、40単位を使っている患者さんも多数おられました。40単位と言われてもピンと来ないと思いますので、図で示すとこのようになります。この患者さんは救命のために赤血球だけでこれだけの投与を行っており、血漿、血小板もたくさん投与を行っています。この患者さんはこういう治療によって救命されています。実際この17人の患者さんは、非常に重篤な状態で皆さん来られたわけですが、8割以上の患者さんが救命に至っています。これらの患者さんは積極的な輸血なくして、決して救命されなかった患者さん方です。

このように大量出血をきたしたような患者さんでは、救命のために20~40単位の赤血球、血漿、血小板輸血、これは400ml献血の10~20回分ですが、このような投与を必要とする患者さんは決してまれではありません。このような状態は本当に戦場のようで、病院備蓄は直ちに使い果たして、血液センターから緊急搬送、血小板については久留米から搬送していただいています。そして途切れることなく輸血を行っています。このような状態の患者さん

で、輸血製剤が不足するようなことがありましたら、これは直ちに命に関わります。このような患者さんの救命を行うためにも、血液センターにしっかりと輸血製剤が保存・備蓄されているのは大変重要なことになっています。

その他様々な状態で、輸血製剤は必要となります。今日お話しすることはできませんでしたが、例えばお産による出血、これも重大な問題です。赤ちゃんにおける貧血に対しても輸血が行われることがあります。このようにがんの治療、手術、外傷、その他さまざまな分野において、輸血療法はなくてはならないものであると言えます。

なお、昨今の Covid-19、新型コロナの流行によって、私たちは輸血療法が同様にできるのであろうかということに非常に心配しました。輸血ができなくなるということは、すなわち多くの医療が止まってしまうことを意味します。実際新型コロナの流行によって、献血バスの協力辞退が 4,000 件以上、国内で見られたとされています。しかしながら幸いなことに、いろいろな各方面の努力と幸運が重なったということもあるわけですが、現在まで輸血の不足は起きずに経過しています。

この図は大分県内における赤血球製剤の在庫量の変化について見てみたものです。大分県内の在庫は大分県のみで管理しているわけではなくて、九州管内で採血された輸血製剤について、各地方の適正在庫を勘案しながら分配されていますので、九州内の在庫量を反映していると考えていいと思います。この3月に急激に在庫量が減って、適正在庫を下回ったという非常に恐ろしい事態が起きたわけですが、本当に素晴らしいと言うか、何と言うか、神が降りてきたと思いましたが、このとき闘病中の水泳選手、池江璃花子選手が Twitter で献血を呼び掛けて、全国的に献血が非常に増えました。本当に絆というものを感じられることでしたが、こういうことが見られました。また輸血・細胞治療学会からも、得られる献血が減少しており、輸血に支障が出てくる、使用について注意するようだという提言がなされました。

また実際には春先からしばらくの間、いろいろな病院では診療制限が行われました。私たち大分大学病院においても、4月から数カ月の間は医療制限が行われまして、いわゆる待機手術は全て中止となりました。これは大分県内における血液センターからの供給量の推移について見てみたものですが、この青色で示す今年の供給量は、すなわち医療機関による使用量は、今年かなり減少していたと言えます。このように使用量が減ったということと、いろいろな献血者における献身的なご協力、また血液センターの努力によって、幸いに現在まで輸血の不足は起きずに経過していました。

しかしながら現在はあらゆる医療行為が、待機手術も含めて同様に提供されており、輸血の使用量も例年と同様になっています。これから第3波が来るというのが危惧されていますが、このような状態においても、必要な診療というのは待機手術も含めてしっかりと提供していくことが、with コロナの時代、コロナとしばらく併走していかなければいけない時代において、非常に重要なことであると思います。このことはすなわち、献血のご協力をいただくことが医療を維持するために、今後重要になってくるということを示しています。

まとめです。輸血というのは、広くさまざまな医療分野において、なくてはならないものである。コロナの流行によって、輸血の不足が心配されましたが、しかしながら献血者の献身的なご協力、また後に話があると思いますけど、血液センターの方々も非常に努力されました。また輸血の使用量が減ったということが医療機関においてあったので、幸いなことにこういうことが重なって、現在までのところは供給不足には陥っていません。

しかしこれから with コロナの時代においては、待機手術も含めて必要な医療が継続してしっかりと提供されていくことが必要となります。このために輸血製剤の安定供給は、なくてはならないものであると言えます。輸血製剤には使用期限があり、日々の確保が必要となります。献血は不要不急の外出ではありません。献血で命をつないでいる患者さんや、外傷などで大量の輸血を必要としている患者さんがおられます。安定して輸血を行うために、医療を守るために、多くの方に献血のご協力を、この場を借りましてお願いさせていただきます。何卒よろしく願いいたします。以上です。

司会：

緒方様、どうもありがとうございました。輸血いただいた血液が、医療の現場でどのように使われているのか、非常に分かりやすくお話しいただきました。輸血製剤、さまざまな病気で戦う方たちのために使われているのだなということが分かりましたね。つまり輸血によって血液の安定供給が図られるということが非常に大切ということですね。with コロナの時代、輸血が不足しないように、安定供給するために献血、私たちもぜひ協力しなければいけないなと思いました。「献血が支える医療～献血の現状とその重要性について～」、大分大学医学部附属病院輸血部長の緒方正男様にお話しいただきました。

続きまして、献血時のコロナ対策と血液確保の取り組みについて、大分県赤十字血液センター、献血推進課長の毛利英明様よりご講演をいただきます。毛利様、どうぞよろしく願いいたします。

3. 講演②

毛利：

皆さん、こんにちは。大分県赤十字血液センター、献血推進課の毛利と申します。私のほうからは、献血時のコロナ対策と、いかにしてこの状況下で血液を確保してきたかということについて、お話をさせていただきたいと思います。

まずいかにして血液を確保してきたかという部分ですが、これは大分県の2月下旬から週ごとの血液の確保状況を示したグラフになります。3月6日以降、先ほどのお話にもありましたとおり、全国ニュースや池江璃花子さんのSNSなどの効果で、一時的に献血者は増加したものの、献血バスの配車はその間もキャンセルが相次いでおりまして、そのキャンセルが日に日に増加して、5週連続で計画数を下回る結果になっていました。

この間、献血ルームだけを見ても、献血ルームにはたくさん献血者の方が来ていた

だけでしたが、献血ルームのベッド数にも限りがあります。それから全血献血は、大分県の場合7割以上をバスで確保しているため、ルームだけに献血者が来て、その増加分だけではカバーしきれませんでした。バスのほうを見てみますと、3月から5月の間にキャンセルが50件ありました。献血バスだけで見れば、7週連続で計画どおりにバスを出すことができませんでした。計画をクリアすることができませんでした。4月中旬から、なぜこのグラフがだんだん黒字に転換できたかというところを、これから見ていきたいと思えます。

バスの行き場がなくて、もがき苦しんでいたときに、ふと頭に浮かんだのが予約運用でした。人が多い場所にバスを出すという従来の考えを180度転換して、どこかとにかくバスが駐車できる場所を確保して、そこに献血目的の方を集めようと考えました。こちらのグラフですが、4月、5月と、企業、大学、イベントなどの中止が相次ぎまして、5月は44台配車したうちの43.2%の19台が街頭献血でした。ちょうどその頃「さまよう献血バス」という大分の新聞記事がYahooのトップニュースに上がったのもこの時期です。19台全て予約運用を実施しまして、ハガキやメールで献血の依頼をかけたその方一人一人に電話で、「できましたら予約をお願いします」ということで、こつこつお願いをし続けました。その結果、この半年間、月ごとに採血の計画本数が出ていますが、全て必要以上確保することができました。一番右に予約の献血者数がありますが、もしもこの予約の方々がゼロだったとしたら、ほとんどの月で必要数を下回る数字となっていたのではないかと思います。

次にコロナ禍での安全対策です。基本はホテルなど、他の業種と同じように体温測定、手指消毒、飛沫防止の亚克力板の設置などを、全国の血液センターでも実施しています。その他に、どうしてもバスは構造上、中が密になりやすいものですから、バスの中に献血者の方を長く滞在させないとか、できるだけ多く詰め込まないとか、そういう努力もしています。あとは換気などにも注意していますが、特に週末の街頭献血などで、同じ時間帯に献血の方が集中することがあります。受付周りの密を避けるためにも、予約運用は効果を発揮します。

写真の様子は、予約運用のバスの模様です。このときも献血は50人以上確保できていますが、予約なしで来場された方も「今だこの時間が空いていますので、この時間でよろしいでしょうか」と、予約を始めると全て区切られた時間の中に入っていただきますから、自分が何時に順番が回ってくるかがはっきりします。そうすると自分の順番まで、自然とどこかで時間を過ごしてもらって、時間になったら戻ってくるということで、受付周りに人が密集しなくなってきました。

最後にバスの予約の実際の様子について、知らない方もいらっしゃると思いますので、少しご説明さしあげます。予約はラブラッドという会員サイトから予約できますが、現在の課題はWebだけでは自然に必要な数の予約は埋まらないという状況です。理想は多くの献血者の方から、自らWebで予約を入れていただけるようになると思っています。これがラブラッドの最初の登録画面ですが、会員登録には献血者コードが必要になります。皆さんが献血すると、献血カードが交付されて、そこに書いてあるナンバーが必要になるので、献血経験者しかWebで予約ができません。大分の場合は、初めて献血する方やラブラッドに入

会していない方は電話で予約を受け付けております。献血者コードを入力して、中にログインしてもらおうと、こういった画面が出てきます。「献血を予約する」をクリックすると、都道府県の地図が出てきます。希望の県を選ぶと予約可能な会場が選択できるようになります。こういった具合に、いつどこで献血がありますというのが次の画面に出てきます。そこでまた「予約する」をクリックすると、カレンダーが表示されて、希望日の希望時間を選択して、予約が成立するという流れになります。

今は平均で 15 人程度の予約が入っていますが、半分は電話で依頼して予約を埋めています。多い会場では Web だけで 30 人程度予約が埋まるケースも出始めています。完全予約ではなくて、当日飛び込みの枠も残しながら予約運用を行っています。

今、残業しながら、メールやハガキを送った方々に、予約のお願いの電話を掛けていますが、先ほども言ったように徐々に Web の予約が増えてきつつあります。今後はラブラッドの会員登録をさらに推進することで、自ら予約していただく方をさらに増やして行って、働き方改革もしていきたい。職員がずっと残って電話をしていますので、そのあたりを改革していければと思っています。

また週末だけではなく、今後は平日の予約運用も取り入れていきたいと思っています。ただ、予約運用はあらかじめ設定した枠の数しか受付ができませんので、予約が急にキャンセルになったり、事前の検査で献血ができないという場合、この予約の枠に穴が開く感じになってきます。たまたま開いた穴が都合よく飛び込みの方で埋まるとか、次の予約の時間の人が早く来ていて、一つ早い時間に入ってもらえればそこがうまく埋まっていきますが、予約をすると先ほど言ったように、自分の時間の直前に見えますので、穴がたくさん開くと、うまくそこに代わりの方を当てはめていくのが難しくなるケースがありまして、そうするとその日の血液の必要数の確保が困難になるケースもあります。

現在システムの改修の検討を行っています。現在は当日受付をした後に、その日の体調や、薬を飲んでいないかとか、そういったものを「はい・いいえ」で答えるタブレットの問診がありますが、システムが改修できれば、そういったものも事前に自分のスマホで済ますことができなかと、今そういったことも検討されています。それらが実現するようになれば、当然献血時間にかかる 1 人当たりの時間も短縮することができますので、そうすると受付可能数が向上しまして、予約運用もスムーズになっていくのではないかと考えています。

今後、with コロナ時代に適合するためには、予約運用にさらに改修を加えながら磨きをかけていきたい。そのためにもラブラッド会員がもっと増えていかないと、うまくいかないだろうと思っています。そして恐らくこれからもコロナの状況は変化し続けるだろうと思っていますので、そういった環境の変化に素早く柔軟に適応していく能力がますます求められるのではないかと考えています。私たち赤十字は、このような苦しい状況のときほど、血液を必要としている患者さんのために、必要量を必ず確保するのだという使命を忘れずに、全国各地で献血推進活動を行って頑張っていますので、今後ともぜひ献血にご協力をお願いいたします。

司会：

毛利様、ありがとうございました。コロナ禍の中、大分県内でいかに血液の安定確保を行ったか。献血の予約運用をするというお話でした。これは安全対策にもつながりますよね。ご紹介いただきました大分県の取り組みは、全国の献血の運用について、大いに参考になったのではないのでしょうか。「献血時のコロナ対策と血液確保の取り組みについて」、大分県赤十字血液センター、献血推進課長、毛利英明様よりお話しいただきました。

続いては、実際に輸血体験をされました山下篤さんより、ご講演をいただきます。山下様、どうぞよろしくお願いいいたします。

4. 講演③

山下：

皆様、あらためましてこんにちは。先ほどご紹介を受けました輸血経験者の山下です。講演に先立ちまして、今、私が元気でこのような場に立つことができたことを、闘病時に支えてくれた家族、友人、職場の皆様、大分県立病院の血液内科の医療スタッフの皆様、宮崎県から長年大分県の骨髄バンクの活動を支えてくれている骨髄バンクボランティアの清水さん、そして SNS などを通じて応援してくれた多くの皆様に、この場を借りてお礼を言わせてください。本当にありがとうございました。またこのコロナ禍において、今も医療現場の最前線で働き、日本の医療を支えてくれている医療スタッフの皆様に心からの敬意と感謝をお伝えいたします。今日は私を救ってくれた医療に関わる方々に、何か少しでも恩返しができればと思い参加いたしました。他の登壇者の方とは違い、専門家ではありませんので、至らぬ点も多く、お聞き苦しいところもあるかと思いますが、最後までどうぞよろしくお願いいいたします。

最初に簡単に自己紹介しますと、山下篤、40歳のサラリーマンです。家族は妻に、長女、長男、そして双子の次女、三女の6人家族です。家族の数は少し多いのですが、どこにでもあるようないわゆる普通の家庭です。そんな私たちの家族の状況は、ある日突然に変わってしまいました。こちらの動画をご覧ください。

(映像)

この動画は今から5年前に急性白血病となった私が、闘病中に骨髄バンクのPRのために個人的に作成したYouTube動画です。僕はもっと生きたい、家族を愛したい、僕に未来をください。ストレートな言葉ですが、骨髄移植に望みをかけたものの、移植できるドナーが見つからず、死と隣合わせだった当時の私の心からの言葉、叫びです。今回輸血経験者としてお話をさせていただくにあたり、少しでも患者のリアルな気持ちを届けたいと思い、この動画をまず紹介いたしました。骨髄バンクについては、今回のテーマとは少し異なりますが、このコロナ禍においては、献血以上に状況が芳しくないことを聞いております。ご了承いただき、併せて応援していただければ幸いです。

私の患った成人性急性リンパ性白血病というのは、いわゆる血液のがんで、成人の場合の発症率は10万人に1人程度と極めてまれで、原因はいまだ解明されておらず、長期生存率は15~35%と言われております。この急性白血病というのは恐ろしいもので、気付かずに放置していると、数週間から数カ月で生命の危機に及ぶそうです。通常は風邪のような症状がずっと続いておかしいとか、容体が急変して見つかるケースもあるらしいですが、私の場合、ほとんど自覚症状もなく、3ヶ月前に受けた健康診断の結果でも特に異常はなく、入院する1週間前には仕事で沖縄に出張に行ったり、3日前には家族旅行で長崎に行ったりと、本当に元気そのものでした。

そんな私がどうして病気が発覚したかと言うと、今思うと生まれてくる子どもたちのおかげでした。わずかな体重減少と運動した際の息切れといった微妙な違和感しかなかったのですが、奥さんが出産前ということもあり、どこか悪いところがあるのでは？早めに直しておこうと、奥さんの検診に付き添っていた大分県立病院に検査に行くことにしました。検査当日も、検査の待ち時間が多分長いだろうから、漫画を持って行って、暇つぶしをしようぐらいの軽い気持ちで行ったことを覚えています。

原因不明ということでいろいろな検査をした結果、血液検査の数値に少し気になるところがあると呼ばれた診察室で、医師の方からとても落ち着いた口調で、こう告げられました。詳しいことはまだはっきりとは言えないが、私の白血球に明らかな異常があること。明日から早急に入院が必要とのこと。最低6カ月間は仕事のことなど何も考えず、治療だけに専念する必要があるとのこと。今思うとそのときの私は、ショックを受けるというか、状況が全く飲み込めず、何も考えられませんでした。普段からお酒もたばこも吸いませんし、それまで大きなけがや病気とは無縁で生きてきた自分にとって、白血病と言えればドラマや小説のヒロインになるものでした。

病気が発覚してから2日後、入院してから初めての朝を迎えた日の日記に、こんなふうにかかれていました。「目覚めると無菌室。こんな日がまさか自分におとずれるとは」。当時奥さんは1ヶ月後に双子の出産を控えて、子どもたちは娘が5歳、息子はまだ2歳です。ドラマや小説の設定にしても、すこしやり過ぎで嘘ではないかと思うような現実でしたが、そこから私の長い無菌室生活が始まりました。

普通の暮らしをしている方にとって、無菌室とはなかなか縁がないと思いますので、少しだけ無菌室での暮らしのお話をします。この写真にあるように、トイレと洗面所とベッドが一緒になった6畳程度の空間が、当時の私の住む世界の全てでした。そして治療中は患者としては体調管理に気を付ける以外は何もすることがありません。外からの菌を持ち込まないために、面会できる家族も10歳以上に制限され、面会する際もビニールカーテン越しで、ときどき来る病院のスタッフの方以外とは人との接触はなく、本当に孤独です。ただ私にとって入院中最も辛かったことは、自分の体調のことよりも、まだ小さな子どもたちに会えない、何もしてあげられないことでした。

この写真は奥さんの出産後にお見舞いに来ていたうちの子どもたちと、検査が終わって

病院の廊下で偶然会ったときの写真です。子どもとの接触が禁じられていたため、子どもたちもその教を忠実に守って、私に近づかないよう遠くから「パパ、大好き」と呼び掛けられても、私は近づくことも抱きしめることもできませんでした。出産をサポートするはずだったのに、病院で奥さんを迎えて、病院から生まれきた赤ちゃんとおさんの出産を見送りました。幼い子どもを抱えて、双子の出産という大変な時期に、旦那ががんになっていなくなるという、精神的にもどうにかなってしまいそうなこの時期を、もちろん家族のサポートもありましたが、1人で乗り越えてくれたうちの奥さんは、私にとってのスーパーヒーローであり、自慢のパートナーです。

少し話がそれましたが、輸血の用途は約8割が病気の治療に使われていて、そのうちの4割は私のようながんの治療だそうです。私が輸血を受けた時期は治療のピークのときで、精神的にも肉体的にも非常にぎりぎりの状態だったため、正直記憶が少し曖昧で、実際の検査数値と当時の写真をもとにお話しいたします。私の場合は、臍帯血移植を行うために、抗がん剤と放射線治療によって、一度自らの骨髄にある病気になった血液細胞を破壊して、極限まで減らす処置を行いました。当時の私の写真がこちらです。よく映画やドラマでは、抗がん剤の影響で髪の毛が抜けて頭がツルツルになって、痩せて、でもお肌がツルツルしたような役者さんが演じていますが、実際はこのように髪の毛はひなどりみたいに抜けていて、皮膚は黒ずんで、肌はカサカサになりました。あと、手や指が思うように動かさなくなっていて、ペンなどもうまく持つことができず、字を書くことすら苦労しました。

こちらのグラフを見てください。正常な人の血小板の数値は、16万～35万の間に入ります。青のグラフが、私が入院してからの実際の血小板の検査数値ですが、治療の影響で血小板の数値がゼロに限りなく近づくほど低下しています。血小板は止血作用がありますので、それが無いということは、一度血が始めると止まらなくなります。この時期に夜歯磨きをしていたときに、ちょっと出血をしてしまい、それが朝まで止まらなかったことがあって、とても怖かったことを覚えています。

私の場合、入院当日から抗がん剤治療が始まり、退院するまでの半年間は常に体のどこかに管が付いていて、何かを流されている状態でしたので、主治医の先生にあらためて伺ったところ、移植前の処置段階で血小板輸血を3回、移植後の処置で血小板輸血を13回、赤血球輸血を3回と、あなたはかなりお世話になっているんだよと教えてくれました。あのときもし移植後に、安定的に輸血できる血液がなかったら、きっと私はこの世にいられません。今あらためて思っても、本当にたくさんの方々のおかげで生きることができたのだと思ひ、感謝の気持ちでいっぱいです。

医学が進歩して、これまで治せなかった病気にも、新しい薬や治療法といった光が見えてきました。でもこれだけ医学が進歩した今でも、血液は人工的に作り出すことはできません。私のような治療を行う者にとって、輸血できる血液があることによって、初めて治療に臨むことができます。どんなに辛い治療に耐えても、血液が届かなければ助かることはできません。今私がここで皆さんの前でお話することができるのも、5年前にどこかの誰か

が献血をしてくれたおかげです。

献血は他人のために痛い思いをして、時間を割いて、メリット・デメリットで考えると、デメリットも多く正直面倒かもしれません。注射が苦手だからしたくない。忙しくて献血をする暇がない。見えない他人のために、やらない理由は探せばたくさん出てきます。でも少しでも思いを馳せていただけないでしょうか。ミエナイタニン、シラナイダレカ、記号のようなその言葉の先には、今もどこかで命の炎を燃やして、わずかな希望にかけて戦っている私たちのような患者がいます。回復を信じて待っている家族や仲間がいます。そしてそれはいつあなたやあなたの大切な人がもらう立場になるかなんて分からないこと。献血によって助けることができる命があることを、そして私のように実際に助けていただいた者がいることを、少しでも多くの方に知っていただきたいです。

明日へ向けた“まなざし”に、希望の“ひかり”が灯るように。あの日無菌室から出産に立ち会った2人の子には、「まな」と「ひかり」と名付けました。無菌室で孤独に戦った私も、献血という命のバトンをつないでいただいたおかげで、厳しい治療を乗り越えることができ、今、家族6人幸せに暮らしています。

最後になりますが、厳しい現状の中、輸血確保のために日々献血を支えていただいている関係者の皆様、提供していただいている皆様、本当にありがとうございます。皆さんの優しさ、善意に生かされて、私たち家族は今、このときを生きています。あなたがくれる命のバトンは、必ず誰かの明日の希望へとつながります。誰にとっても、どんなときでも、未来に希望がある世界になるように。本日は貴重なお時間をいただき、誠にありがとうございました。

司会：

山下さん、ありがとうございました。大変実感がこもったお話に感動いたしました。5年前に急性白血病の病で大変お辛い闘病生活を送られた山下さん。輸血によって大切な命を救われました。現在とてもお元気な様子ですが、どうぞご自愛ください。ご自身の輸血体験について、山下篤さんにお話しいただきました。

続いては、大分県学生献血推進協議会で会長を務められております日本文理大学医療専門学校2年生の中村祐貴さんより、学生ボランティアの立場からお話しいただきます。中村さん、どうぞよろしく願いいたします。

5. 講演④

中村：

よろしく申し上げます。ご紹介いただき、ありがとうございます。あらためて自己紹介させていただきます。大分県内における学生によるボランティア団体、大分県学生献血推進協議会にて、第29代会長を務めさせていただいております中村祐貴と申します。どうぞよろしく申し上げます。

本日は少しお時間をいただき、私たち大分県学生献血推進協議会についてのご紹介、また新型コロナウイルス感染拡大以前の活動についてのご紹介と、今後のコロナ禍における活動の展望について、お話しさせていただきたいと思います。

まず私たち大分県学生献血推進協議会がどのような団体か、ご紹介させていただきます。大分県学生献血推進協議会とは、大分県内の学生有志によるボランティア団体で、現在 27 の大学や専門学校に加盟していただいています。また全国に同様のボランティア団体があり、全国では約 6,000 名の学生が、学生献血推進ボランティアとして活動しています。活動内容としては、主に献血会場における献血の呼び掛けや啓発活動、また献血啓発イベントなどの企画や運営を行っています。その中で私たちにしかできないこと。「学生の目線で、学生らしい献血推進活動を行う」のテーマのもと、10 代、20 代の若年層をはじめとした県内の皆様に、献血の重要性や必要性を広く知ってもらい、献血に協力いただける方を増やしていくことを目的として活動しています。

ではここで、新型コロナウイルス感染拡大以前にどのような活動を行っていたのか、主なイベントを少しご紹介させていただこうと思います。また私たちの団体名ですが、以降通称である大分学推と呼ばさせていただきます。私たち大分学推の 1 年間の主な内容としては、4 月に合同研修会、7 月に献血サポーター、12 月に全国学生クリスマス献血キャンペーン、1 月に「はたちの献血」キャンペーンを行っています。これらのイベントの企画や運営、またこの他に月に 1 度、ショッピングモールなどで献血の呼び掛けを行うのが主な活動です。

まず 4 月に行う合同研修会の説明をさせていただきます。合同研修会では、大学に入学したばかりの生徒さんなどを募集して、献血についての知識、大分学推の活動について説明して興味を持っていただくイベントです。内容としては、献血についての知識などを紹介する献血セミナーや、実際に大分県で使用している献血バスの内部の見学がメインとなります。昨年は 16 名の方に参加していただきました。こちらが実際の様子です。この研修会を通して、少しでも献血に興味を持ってもらったり、研修会をきっかけに大分学推として一緒に活動してくれる仲間を集めたりもします。

次に 7 月に実施した献血サポーターについてですが、地元大分のサッカーチームと協力して、献血の必要性や重要性を啓発するイベントです。試合が始まる前にピッチに立たせていただき、試合に来場されたサポーターの方々へ献血の啓発を行います。また昨年は新たな取り組みとして、SNS を活用し Twitter を使ったキャンペーンにも挑戦しました。こちらが実際の様子です。ピッチに立つ機会はなかなかないためとても緊張しましたが、非常にいい経験となりました。初めて実施した SNS を利用してのキャンペーンも、改善点や課題なども多くありましたが、今後の新しい啓発活動の参考になる取り組みだったと思います。

12 月に行うクリスマスキャンペーンでは、全国の学推、献血推進ボランティアが協力して、時期や記念品などを統一して行う大きなイベントとなっています。また大分学推では、この取り組みにさらに大分らしさを取り入れるように、くじ引きを用意したり、サンタやトナカイの衣装を着ることで、少しでも興味を持っていただくように工夫しました。サンタや

トナカイの衣装でクリスマス感を演出することで、まずは何をしているのかと興味を持ってもらい、献血について知るきっかけづくりができたと思っています。こちらが実際の様子です。クリスマスキャンペーンでは、事前の準備は大変ですが、大変な分だけとても達成感のあるイベントだと思います。

1月に実施する「はたちの献血」の呼び掛けでは、新成人の皆さんをお祝いするとともに、大人になった機会に今一度献血の重要性について考えていただくというイベントです。成人の方々に「あなたにとって献血とは」というキーワードで、ホワイトボードにメッセージを書いていたいたり、けんけつちゃんとの記念撮影などをして盛り上がるとともに、献血の啓発を行いました。こちらが実際の様子です。成人式の会場でも、けんけつちゃんは大人気でした。このように新型コロナウイルス感染拡大以前は、人と触れ合うことで献血に興味を持ってもらい、献血の必要性や重要性を考えていただくきっかけづくりとなるようなイベントを多く行っていました。しかし新型コロナウイルスが感染拡大し、現在これらのイベントは全く行えていません。大分学推として、今までと同じことをするのではなく、何ができるのか、どうやったらできるのかを考え、変化していかなければいけないと思っています。

最後にコロナ禍における今後の活動の展望について、お話しさせていただこうと思います。先ほどもお話ししたように、今年度私たち大分学推は、感染防止の観点から満足に活動ができていません。現在少しずつ活動再開に向けて動き出してはいますが、世の中が新型コロナウイルスに対応するため、新しく変わっていく中で、私たちも従来のやり方ではなく、新しい啓発活動の方法を模索していく必要があると考えています。

ここで大分学推としてどのようなことができるのか、仲間たちと話し合った内容を幾つかご紹介します。大分学推のメンバーの意見の中で、やはり直接的な啓発活動の実施が困難になっているという点が挙げられました。そこで私たちが考えたのが、今のスライドに表示させていただいているメディア、SNSを有効活用したり、リモートでの献血啓発活動を行うということです。直接触れ合うことが難しい現状で、私たちの声を伝えていくには、どのような方法があるのかと話し合う中で、昨年行ったTwitterを利用してのキャンペーンが思い浮かびました。そのときの経験を生かし、SNSを活用することで、新しい形での情報発信、献血啓発活動ができるのではないかと考えました。この他にはラジオやテレビへの出演をすることでの情報発信、リモートでの交流会や他県との情報交換、YouTubeを利用した献血セミナー動画の投稿、リモートでの献血セミナー啓発活動などで、実施にあたっての方法や手順など、まだまだ手探りな状況ですが、今だからこそできる方法で、今後も献血の啓発活動を行っていこうと思っています。

最後にコロナ禍で活動していくにあたり、私たち大分学推1人1人では、できることも思い浮かぶアイデアにも限りがあると思っています。しかし私たち学生献血推進ボランティアは、全国に約6,000人もの仲間たちがいます。また献血を支えてくださっている何十万、何百万人という多くの方々があります。新型コロナウイルスの感染拡大という、経験のないよ

うな大変な状況でも、みんなで意見を出し合い、みんなで考えることで、私たち学生にしかできない目線で、学生らしい献血啓発活動が実現できると思っています。

献血は不要不急ではありません。輸血を待つ患者さんにとって必要不可欠です。今後も献血の必要性や重要性を多くの人に広めていけたらいいなと思っています。ご清聴ありがとうございました。

司会：

中村さん、ありがとうございました。これからも学生ボランティアの活動、頑張ってください。大分県学生献血推進協議会会長の中村祐貴さんに、学生ボランティアの立場からお話しいただきました。それではここで本日の開催地、大分県について映像でご紹介いたします。ご覧ください。

本日の開催地、大分県について映像でご紹介いたしました。それではここからは、本日それぞれの視点からご講演いただいた皆さんによるパネルディスカッションです。なお、ファシリテーターは厚生労働省の中谷が務めさせていただきます。それでは皆さん、よろしくお願いいたします。

6. パネルディスカッション

中谷：

それではパネルディスカッションに移らせていただきます。皆様からそれぞれ取り組んでいただいていることや、山下さんからは輸血を経験した思い、大変感動的なお話をいただいたり、ボランティア活動もこのコロナ禍で思うようにできないけれども、いろいろ工夫をいただいていることなど、お話しいただきました。パネルディスカッションでは、あらためてそれらのことも含めまして、意見交換をさせていただければと思いますので、よろしくお願いいたします。私だけリモートでの参加なので、逆に緊張いたしますが、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、さまざま課題はあると思うのですが、特にこれから将来の安定的な供給という観点では、若い方にこの献血をご理解いただき、ご協力をいただくことが非常に重要だと思っておりますので、この若年者の献血者が減少している課題を取り上げて、まずディスカッションさせていただければと思います。まず若い方の代表というわけではございませんが、特に若い視点でどういったご意見があるかを伺いたいのですが、中村さん、お願いできますでしょうか。

中村：

若年層の方の献血者数が少なくなっている原因として、献血についてよく知らないとい

うことが一番だと僕は思っています。僕も初めて献血に行ったときは、献血をされているところを見て、何をしているのだろう、献血をしたいけど何をしたらいいのだろうと、まず分からないということが前提に入ってくるので、まず知っていただくことを重点的に置いていくべきではないかと思えます。

そういう点では、僕は専門学校に来て初めて知ったので、小中学生であったり、高校生に向かって、「献血というものはこういうものだよ」「こういう内容だよ」と知らせてあげること、これからどんどん若年層の献血者数が増えていったり、今、社会的なブームとして『鬼滅の刃』がありますが、『鬼滅の刃』とコラボして何か献血のグッズを作ったりすることで、若年層の人たちであったり、それだけではなく幅広い年代の方に献血を知っていただくきっかけになるのではないかと、僕は思っています。

中谷：

ありがとうございます。献血のきっかけ、献血をまず知ることが一番重要であると。知らないで、お話を聞けば、「じゃあ、やろうかな」ということを皆さん理解していただけるのですが、知るきっかけというところ、やはり啓発活動が重要であるというご意見だったかと思えますが、そういう意味では、今、年齢別に献血率を見てみますと、やはり40代、50代が一番高いという状況でして、そういった年代でなぜ献血が高いのかですとか、今の啓発について、どんな取り組みがあるかにつきまして、実際に今取り組みを進めていただいている毛利さん、ご意見をいただけますでしょうか。

毛利：

今50代の方々の献血率が高いのは、当時高校献血が盛んで、ほとんどの高校で献血を実施していた時期の高校生だった方が、今50代ぐらいになっているから、その方々はやはりハードルが低くて、献血を若い頃にして、そのまま継続していつている感じなんですね。ですから、今その状況に10代、20代の、学校で献血をあの当時ぐらいまで戻せるかと言うと、教育現場のほうはいろいろな行事が増えていまして、私も昨年まで娘が高校生でしたから見てみると、学校がそこまで時間を割いてくれる余力がないのかなというのが、正直なところ。お願いは行きますが、なかなか苦しいと現場では言われます。

一つ考えられるのは、「1日献血を学校で実施するのは難しくても、20分、30分なら、献血セミナーとして時間は取れますよ、献血セミナーなら協力できますよ」と言ってくださる学校や、大学、専門学校さんがありますので、そちらでセミナーで、なぜ献血が必要なのか、献血はどうすればできるのかを広めて、そのときに熱が冷めないうちにラブラッドの会員になってもらおうと思っていますが、いかんせん、今のラブラッドの仕組みは、先ほどもお話ししたように、献血を1回経験していないと登録できないので、ここを今、次のラブラッドのバージョンでは、献血経験がない方も登録できるように、今検討がされています。それができるようになれば、献血セミナーをもっと広めて、ラブラッドの会員になって、そこか

らさらに情報を送っていくことができるので、今の若年層を増やすようなきっかけにはなるのかなと思っております。

中谷：

ありがとうございます。やはり学校とのコラボレーションした活動というところが、特に若い方への啓発では重要だということですが、もしよろしければ大分県では教育現場とのコラボレーションで、どのような活動、工夫されているかについて、北村さんからご意見をお願いできますでしょうか。

北村：

開会の挨拶の中でも少し触れたかと思いますが、大分県では現在、高校生献血の輪拡大推進事業に取り組んでおります。これは高校生の時期から、献血に関心を持ってもらって、それによって献血推進の機運を高めるということで、将来にわたる献血者の確保をすることを目的として実施しております。具体的な実施内容としましては、文化祭などを活用した校内での啓発活動、あるいは校内放送での呼び掛け、それから地元のライオンズクラブとコラボした街頭広報の実施であるとか、あるいは献血推進のポスターの作成・掲示といったものに取り組んでいただいています。現在、県内約70校の高校がありますが、実際に加入していただいているのは14校ですので、これから加入校を増やしていくことが必要だと考えております。

中谷：

ありがとうございます。具体的に高校生の拡大の場ということで、文化祭などとタイアップして広げていただいているということで、ぜひこれが県内にもさらに広がるということを目指しますし、私も国としましても、そういった自治体での先進事例につきましては、全国に広がるように働きかけをしていきたいと思っておりますので、またいろいろと教えていただければと思います。少し中村さんのほうから『鬼滅の刃』とコラボしてはどうかですとか、啓発のやり方として、街頭ですとか、セミナーですとか、いろいろなやり方があると思いますが、若い方に響く啓発、SNSなども工夫されていると思いますが、今の若い方にどういった啓発が響くかということについて、何かご意見いただければと思いますが、いかがでしょうか。

中村：

難しい質問ですね。自分として一番最初に上がったのは『鬼滅の刃』でしたが、他にも今、乃木坂さんとのコラボで、クリアファイルを献血された方にプレゼントしたり、若年層の人に知ってもらうという点においては、やはりTwitterであったり、有名なものでコラボという形でないと厳しいのかなと、自分は思います。

中谷：

ありがとうございます。今、山下さんがコメントがあるということですので、ご意見をお願いできますでしょうか。

山下：

私は今 40 歳で決して若者の立場ではないですが、若者がなぜ献血に来ないのかという議論に今なっていますが、実はそれは私たち大人の世代が、きっちりとした制度としてつくってこなかったから、若者は別に献血に行きたくないのではなくて、私は皆さんのように普段お仕事をしている方とは違いますので、ちょっと一般人の感覚として言わせていただくと、私たち一般人にとって、献血というのは、皆さんみたいにどこにでもあるものではないんですね。それは決して当たり前ではないですし、そもそも今ここで、「なぜ若者に届かないのか」「若者にどうやったらブームをつくるのか」ということもあります。ブームというのは一時的に上がるだけで、献血というのはブームではなくて、きっちりとした文化として根付かせていかないといけないと思います。

そのためにどうすればいいかというと、私はやはり教育だと思います。今 SNS が発達していて、例えば SNS で情報を発信しましょうと言いますが、SNS はその情報が欲しい人には届きますが、関係ない人には届かないんですよ。これから多分どんどんそういう時代になっていくと考えたときに、やはり小学校や中学校という教育の場で、義務教育の段階で、献血というものがあるし、重要なんだよということをきっちり教えていくことが重要だと思います。私も学習指導要領なども見させていただきましたが、献血については、高校の保健体育のところで、適宜献血などもあるよというので、触れなさいと書かれていて、それ以外は学習指導要領にも記載されていないので、学校の中でするのは難しくなっていると思います。

個人的にボランティアで、献血がすごく危ないときなどに、どうにかしましょうと呼び掛けている方も知っていますし、個人的に何百回も献血をしてくれている方も知っていますし、恐らく今、そういう方々のおかげでなんとかこの制度が成り立っているのであって、実はこの制度がきちんとしているから、今の制度がいいから維持できているのではなくて、私は現場の方に本当に感謝していますが、そういう方々のおかげで制度が成立できていますが、国として、もっと上の段階として、献血というものが当たり前であって、「あなた、しますか、しませんか」ぐらいの議論になるほうに、まず持って行ってあげないと、若者がしたくないのではないと思います。若者だって、当然僕みたいに困っている人がいて、「助けてよ」と言えば、絶対助けてくれるんですよ。ただ、病気になっている人が、道端にそこにいるわけではないので、若いときはそういう方に触れる機会も全然ないし、大人になると、自分がどこか悪いなということがいっぱいあったりして、自分の健康に気を付けることがあって、そういう意識は当然高まりますが、若い方に向けて、きっちり教育してほしいと

というのが、私の気持ちとしてあります。

中谷：

確かに教育の中で、デフォルトでみんな知識として持つという形を徹底することが、まさに啓発にもつながるといふ貴重なご意見であったと思いますが、今、高校の指導要領にもございますし、教育委員会単位で取り組んでいただいている自治体もございまして、そういった先進的な取り組みを横展開させていただくということ、来年度の献血推進計画というものの中でも触れさせていただいて、周知をしているところですが、まさにその取り組むかどうかというところが、教育現場のほうでの熱意と言いますか、いろいろな行事が立て込む中で、どこまで取り上げていただけるかというところ、我々もしっかり取り組んでいく必要があるなと思って、今のご意見を伺っておりました。ありがとうございます。これに関して、何か追加でご発言など、ございますか。毛利さん、挙手をいただいたのでお願いします。

毛利：

割り込んですみません。今、山下さんが言われた件で、この前大分大学で献血を実施しました。大分大学は、コロナになってからずっとリモートの授業ばかりだったので、学生が校内に来ていないので、ずっと献血ができていませんでしたが、今でもリモートの割合のほうが多いのですが、一部再開したということで、献血バスを出ささせていただきましたが、恐らく学生さんがいつもより少ないだろうから、普通にバスを出してお願いしても難しいかもしれないということで、去年大分大学で協力いただいた方の中で、恐らくまだ在学されている年代の人たちに電話を掛けました。予約ではありませんでしたが、「今こういう現状で、今年度若い人たちが昨年に比べて800人ほど少ないので、来られるなら献血に来てほしい、そのことをみんなにも伝えてほしい」と電話したところ、いざ学校にバスを出したら、本当に学生さんたちが歩いていないような状況のところ、「献血のために来ました」とたくさん学生さんが来てくれました。みんな、献血が必要あれば来てくれるんだなと。避けているわけではなくて。

「高齢化社会になっていくから、将来血液が足りなくなるかもしれないから、そのために若い人が今から献血して支えてね」という切り口だと、「今は困っていないくて、将来困るから協力して」というようにとられてしまうのかなと。だから今でも血液が必要で、全ての年代で支えないといけなくて、だけど若い人たちの年代の協力が減っているから、今足を運んでほしいという切り口で行くほうが、彼らは足を運んでくれるのかなと、少し大分大学の献血で感じました。以上です。

中谷：

私も今のご貴重な意見を伺っていて、確かに献血者の数ということの一つの指標で、国民のうちの何人が献血しているかというのは、一面しか見ていないので、血液につきまして

は、有効期間が短いということで、安定供給が非常に重要な製剤でございます。先ほどラブラッドが予約推進をしているということで、不足したときにラブラッドで呼び掛けることで献血していただける方を集めるというようなやり方でも、ラブラッドの予約は活用できると伺っていますが、必要なときにそういった情報を伝えて集まっていただく。あるいは今回毛利さんからご紹介いただいた予約運用でも、電話を掛けてそのことをお伝えするのですとか、すごく大変な取り組みだったのではないかと思います、その辺り、安定的に供給するという観点での取り組みやご意見がありましたらお願いしたいのですが、これはまた毛利さんにお伺いすることになるかと思いますが…

毛利：

私ばかりしゃべってすみません。安定的に供給する取り組みとして、時期的に夏とか冬場は献血者の確保に苦労します。夏は夏休みもありますし、夏バテして疲れている人も出やすい。冬は冬休みもあり、風邪引きさんでお薬を飲んでいる方がいて、そういう時期に在庫が下がりがちですが、私たち今、大分のやり方としては、同じ時期に同じところに行けるだけ行かせてもらおうとしています。取りにくい時期であっても、毎年同じところに行ければ、その数が見込めるんですね。だから計算が立つというか…なかなかそこが企業さんの予定もあり、かっちりハマりはしないのですが、一つはそういうところが大事かと。

当然そこだけでは足りずに、街頭献血にバスを出すので、そこは不特定多数の人たちですから、毎回人が入れ替わります。そこを安定させようとする、やはり予約をしていくのが大事なのかなと。自動的に皆さんが予約が定着して入ってくればいいのですが、何日か前に予約を確認して、夏とか予約が少ないときがあるかもしれません。そういうときには電話で依頼をかけて、予約をある程度いつもと同じようにしていけば、街頭献血も常に安定していくのではないかと考えています。現に大分はだいぶ安定感が増してきているような気がします。以上です。

中谷：

ありがとうございます。山下さんがご意見があるということで、山下さん、お願いいたします。

山下：

毛利さんにお伺いしたいのですが、献血バスの運行スケジュールを見させていただきましたが、役所とか、ショッピングモールとか、病院とかが多いと思いますが、平日はそういうところに行っていて、それ以外は行ってないですか。それ以外に、例えば予約している企業に行っているとか、そういうことではなくて、インターネット上にスケジュールが出ているのが、運行スケジュールの全てですか。

毛利：

インターネットに出しているのは、一般の方が入れる献血会場です。大きな製造業の会社とかは、基本的に一般の方が入れませんから、そういったところはインターネットでは載せていません。

山下：

そういうことなんですね、ありがとうございます。

中谷：

ありがとうございます。山下さんに今の関連でご意見を伺いたいのですが、働く人にもきちんと情報が伝わるのが重要なのかなと思いますが、会社で働いている人ということでは、企業での献血に協力する取り組みですとか、何かご意見ありますでしょうか。

山下：

私の近くに役所がありますので、役所で献血をする際には、うちの事務所のほうで、「この日にありますよ」というのがあるので、最近自分の義務だなと思っていますが、そういうのがある場合は、私みたいに明らかに恩恵を受けた者は、なるべく職員の方に、「今度あるんだよ」と一言言うようなことはしています。そう考えてみると、病気になった人は言いにくかったり、会社でそういうのを出すのは難しいのかもしれませんが、お世話になった分はお返しするというような気持ちを…私なんて輸血もしてますし、臍帯血という、人から全て助けていただいているので、そういうふうにお返ししていくのが一番いいのかなというのと、あと例えばですけど、先ほど私、教育と言いましたが、小学校や中学校を借りて、献血会場としておいて、実際に大人が献血している姿を子どもたちが見られるというところにしてみるというのも、いいのではないかと思います。家族連れでわざわざ献血ルームに行くかと言うと、なかなか遊んでいるときに、お父さんだけ献血ルームに行くとなると難しいのかなとも思いますが、お父さんやお母さんが社会に貢献していたり、困っている人を助ける姿を、子どもたちにじかに見せてあげる機会を増やすという意味では、学校の現場を…学校が、不審者が入ってきたら困るとか、なかなか難しいのかもしれないですが、そういう場や、今まで以外の場を考えてみるのも面白いのかなと思ったりしました。

中谷：

ありがとうございます。私も教育ということが非常に重要で、教育現場での教育もそうですが、それぞれの家庭での、親から子への教育も非常に重要で、どこのルームだったか、自治体さんだったか忘れましたが、キッズ献血ということで、お子さんにそれぞれ役割を与えて、献血の真似をしてみるということで、献血のことを勉強していただくという取り組みもあるし、親御さんがそういうのを理解して、それを子どもさんに伝えるというのは、非常に

重要なことだなど、今ご意見を伺っていて感じました。ありがとうございます。この啓発に関して、ご意見ございますか。緒方先生、医療のお立場からご意見いただいてもよろしいですか。

緒方：

話が戻って申し訳ないですが、若い人の献血が少なくて50代が多い、若い人は公共心がないからけしからんということは決してないわけで、みんな機会があれば提供いただける方々、ポテンシャルはすごくあると思います。やはり機会と情報だと思います。僕も自分の高校生の子供と話をしてみたら、「献血行かないらしいね」「いや、来たら行くよ」という話をするし、そういう話はよく聞きます。実際学校に来たら、すぐに行くと。学校の先生が前もって説明をして、献血バスが来たら、すぐに行ってくれると言うので、それは学校や職場が理解してくれて、少しでも教育の機会があれば、行くポテンシャルはすごくあると思います。

あとは情報ということですが、初回の採血をそのように経験するということ、あとリピーターということになってきたときには、ちゃんと情報を伝えることが大事になっていくと思いますが、私はよく医学部生と接するので、ちょっと偏った人たちかもしれませんが、彼らと話をしていると思うのが、人を助けたいという思いは強くありますが、その行動が目立ちたくない、でしゃばりたくない、他の人を巻き込みたくない、ちょっと今の人的だと思いますが、そういう感じがあるんですね。そういう人たちは、自分たちで情報を見て、自分たちでかみ砕いて、リテラシーとも言われると思いますが、判断することがありますので、そういう方々に対しては、連れ立って献血行こうやと、なかなかなりにくい人たちだと思いますので、今、ラブラッドの話が出ていますが、ラブラッドが献血をやっていることを知っている人は少ないと思います。むしろ今はスマホで、スマホは通知という機能もあるし、そこに情報が一元化されている。今の学生はスマホに情報を一元化していますので、そこを見れば過去の自分の献血データが出るとか、履歴が出るとか、あるいは献血がどこが減っているとか、献血ルーム、どこで今やっていますよとか、そういう通知がされるようになると、まただいぶ違ってくるのかなと思いました。

中谷：

貴重なご意見、ありがとうございます。その関連で次のテーマに移りたいと思いますが、本日のシンポジウムのテーマ、with コロナ時代の献血ということで、今、緒方先生からの通知機能ですとか、ラブラッドの情報を活用するですとか、with コロナで予約は随分と進みましたし、献血ルームも土日に来る人が集まるところということだけではなく、先ほどの毛利さんのお話のように、ルームに来ていただくために、情報をタイムリーに伝えることが重要だということで、やはりがらっとやり方も変わってくるのだらうと思いますし、若い方も連れ立って行こうというところで、私が最初に献血したのは高校のクラブで連れ立ってル

ームに行ったのですが、今の若い方はそうではないとすると、どういう情報のルートで、どういう働きかけの仕方があるのかということになりますし、with コロナという視点で、パネラーの皆様それぞれご意見をいただければと思います。順番としまして、お座りいただいている順で、中村さんからよろしいでしょうか。お願いします。

中村：

直接的に情報を「献血があるよ」と広めることはないですが、献血センターの職員さん方に協力していただいて、加盟校である 27 校に、「こういう献血のボランティアがありますよ」とか、「まず献血について知ってみませんか」というセミナーを開催していくことが、自分たちに最大限できることではないかと思います。

毛利：

ラブラッドを中心に献血者を確保していく仕組みをもっと進化させていければと思っています。若年層の問題もそうですし、今はラブラッドのシステムは Web ですが、先生が言われたように、若い人をつかまえるなら、最終的にはアプリにしたほうがいいのかとか、いろいろありますが、いずれにせよ、ラブラッドをもっと進化させて活用することが、若年層の問題にしろ、いろいろな問題を解決する鍵になっていくのかと思います。献血セミナーもリモートのやり方を開拓して、ラブラッドを広めていけないか。その辺り今後頑張って、開拓していこうかなと思います。以上です。

中谷：

ありがとうございます。確かに今日のシンポジウムも、私 1 人ですがリモートでということで、こういうやり方も、コロナが起こってからは随分増えたと思いますし、そういった新しいやり方が時代に合ってくるのかなという気がいたします。続きまして、緒方先生お願いできますか。

緒方：

私たち医療従事者としては、with コロナの時代、コロナと併走していく時代ということですが、長い戦いになると思いますので、この期間、医療の手を緩めてはいけない、コロナ以外の手術にしても、血液疾患の移植にしても治療にしても、同じように患者さんを救命していかなければいけないので、これが切実な問題になっていきます。そのためには輸血の安定供給をぜひともお願いしたいところですが、我々医療機関においても、病院内の輸血療法委員会でも、このような状況、献血が減っている、輸血が足りなくなる可能性があるということを、ずっとお話をしてきました。その中でみんなが感じてくれたのは、輸血というのは、水みたいに当たり前オーダーすれば来るものではなくて、このような危ういシステムの中で、なんとか社会によって支えられているものなんだということを、理解していただけた

部分が、いろいろな診療科の先生であったと思います。そういう機会にもなったと思います。

今以上に、輸血が本当に必要かということを通正使用ということを進めることにも、今回のことがつながったことがあるかと思います。輸血をなるべく使わないでできる医療を、今後開発していくきっかけにも、もしかしたらなったのかもしれませんが。ただこれはすぐにはできませんので、ぜひとも輸血の安定供給は、なんとかこういうシンポジウムを通じて、医療をどのように行うことができるかと、切実に思っております。以上です。

中谷：

まとめのようなご意見をいただいておりますが、まだ少し時間がございますので、今の先生のご発言で、適正使用というところが、献血血液の確保と一緒に重要なところになってきますが、今回の with コロナで、適正使用に関しては、具体的にどういったところが進んだか、もう少しご説明いただければと思います。

緒方：

輸血のガイドラインというものがありますが、それでも念のため使うみたいな場面が、ちょっとあるかもしれないので、そういうところを控えていこうというものであるとか、血漿製剤の適正使用についても、基準値を満たして使おうという流れが少し出てきたと思います。実際院内でも、足りなくなる可能性がありますというお話を、使用量がちょっと減ってきていると思います。

中谷：

先生のご発表にもありましたが、春頃は、非常に診療抑制もありましたので、そういう意味では、献血血液の確保と呼応するように、こう「フー」というところがありました。今後新型コロナの第3波が再びあっても、あのような緊急事態宣言のような強力な措置はもう難しいという見方が大勢ですので、そうしますと、本気で患者が増えたときに、医療も継続するけど、献血血液もしっかり確保するというのが、本当にこれからが正念場だと思っていますので、まさに今日のシンポジウムは、本当に時期を得たものだったのではないかと思います。貴重なご意見、ありがとうございます。続きまして、北村さんから with コロナでのご意見をいただければと思います。

北村：

行政の立場としては啓発活動というのがあると思います。例年7月に、愛の血液助け合い運動、1月に「はたちの献血」キャンペーンということで、従来は街頭でいろいろな啓発物品を配布したりしていましたが、7月の愛の血液助け合い運動では、それはやめて、県庁のホームページを活用したり、あるいは県庁内のデジタルサイネージを活用したりといった方法で広報してまいりました。また1月の「はたちの献血」キャンペーンにつきましても、

成人式の中に行つての配布は難しいと思っています。広報媒体をうまく活用した啓発が今後必要になってくるのではないかと考えております。

中谷：

ありがとうございます。追加ですみません。「はたちの献血」キャンペーンは、これから各自治体がまさに直面して、どういうやり方でやろうかということ、血液センターと相談されていると思いますが、リモートですとか、媒体の配り方ですとか、献血バスの出し方も工夫が要ると思いますが、全国の参考にという意味で、大分県さんでは今どのようなことをお考えなのか、少し具体的に教えていただければ助かります。

北村：

この前センターとも話をしましたが、学推協に加入している大学に行つて、啓発物品を配ろうかと考えています。あとはホームページやそういったものを活用した啓発を行つていこうと考えております。

中谷：

先ほど大学に献血バスを出したときに、事前にそういった啓発をすることで、非常に学生が集まってくれたということも参考になる取り組みですので、やはり啓発と現地の取り組みをうまく併せてやるということも重要なことだと思つて、ご意見伺いました。ありがとうございます。それではwith コロナに関してのご意見ということで、時間も終盤なので、ほぼ締めていただくぐらいの勢いで、山下さんからご意見をいただければと思います。よろしくお願いいたします。

山下：

with コロナというか、私としてはせつ々しくないので、こういうときなので、患者としての話をしておきたいなと思います。私は輸血であつたり、臍帯血であつたり、人からもらつてしか治せない、そういう治療をしてきました。私が実際に入院していたときも、無菌室が私だけではなく、隣の部屋にも、隣の部屋にも、やはり誰かがいて、誰かの家族が悲しい顔をしてお見舞いをしていました。私の場合は、骨髄移植ができなくて、兄弟とも骨髄が合わなくて、骨髄バンクでドナーを探しましたが、それでも見つかりませんでした。私の場合、「骨髄移植だったら治せるよ」と言われていましたが、ドナーが見つからなくて治せない。治療方法はあるのに、治すための道具が揃わないから治せない。私は治療中、泣くこともなくやっていたんですが、骨髄のドナーが見つからないと言われたときだけは、白血病と宣告されたときよりもショックで、とにかく怖かったです。

先ほど私のスライドでも言いましたが、輸血が届くことによって、私のような者は治療することができて、それは本当に辛いです。がんの治療というのは、ぎりぎりな状態で戦つて

いて、どんなに辛い治療に耐えても、血が届かなくて治らないというのだけは、やはり助け
ていただきたいというか、助けていただけるのであれば、どうしても助けていただきたい。
もらった者としては、もらった分以上は恩返しをしたいし、私は闘病中も SNS を通じて、ど
んどん発信していきましたが、これを今見ている病気の方で、輸血を受けられる方もいると
思いますが、多少しんどいかもしれないですが、自分の気持ちを発信することで、助けてく
れる人は必ずいます。それは私自身がすごく実感して、届く人は必ずいます。

骨髄バンクのドナーについても、入院して治療するときは見つからなかったのですが、こ
の前3年ぶりに検索してみると、私がいろいろ活動した後に見てみると、私の骨髄にマッチ
する人が出てきていました。当時は私の遺伝子が珍しくて、マッチする人はなかなかいない
と言われていましたが、私が必死にアピールしたら、どこか遺伝子がつながっていたのか、
なんか増えてたんですね。

そういうふうな、病気になったとしても発信することで、世の中には伝わるし、変えてい
くこともできるので、今病気で戦っている人も、病気も辛いですが、世の中も変えていけま
すし、とにかく頑張っていきましょう。急性白血病になって頑張っている人、無菌室で見
ている人たちに、僕はすごく届けたくて、僕は自分が病気だったときに、自分の病気だった人
が元気で生きている姿が、すごく心の支えになったので、もし今、どこかで苦しんでいる人
がいたら、きっと乗り越えられるので、頑張っていきましょう。どこかで会いましょうとい
うのを伝えたい。すみません、テーマと違ってきましたが、そういうふうなことをや
っていきましょう。

中谷：

ありがとうございます。非常に感動的なお話でした。このコロナで、いろいろな方が苦勞
されて、社会全体が大きな打撃を受けた中で、どう生きていくかということ、皆さん考え
ていらっしゃるという中で、私の印象で恐縮ですが、山下さんは白血病という病気の治療を
乗り越えて、本当にご苦勞されたと思いますが、逆にご家族の絆であったり、得るものも大
きいのではないかと感じて、すごく勇気を頂きました。

今日のテーマ、with コロナ時代における献血のあり方ということで、with コロナで新し
くなる、献血自体も新しくなるし、私も今日、献血というテーマですが、献血啓発をして血
を集めるところまで終わるのでなく、それをしっかり医療に使って、患者さんが治る
というところまでが一つの流れですので、そういった治療で使ったことも踏まえて、またそ
れが啓発につながるという大きな循環を、連携して進めていければ、すごく with コロナ時
代にいいのではないかと。そうした情報がいろいろつなげやすくなるということも、この with
コロナ時代ではないかなということで、今日皆さんのお話を聞いて思っておりました。

(7. 閉会挨拶)

ちょうど時間も来ておりますので、私、閉会の挨拶も兼ねて少しお話ししたいと思います

が、本日長時間にわたりまして、シンポジウムに貴重なお話をいただきましたパネラーの皆様、本当にありがとうございました。大変勉強になりましたし、すごく私は勇気をいただいた2時間だったと思います。それから長時間にわたり、ご視聴いただきました皆様、本当にお付き合いいただきましてありがとうございます。

今日のことを踏まえて、ご自身も献血への協力を、気持ちをあらたにさせていただきたいと思ひますし、ぜひ周りのご家族やお友だち、職場や学校の友だちや同僚にも、献血の重要性を広めていただきたいと思います。今日は貴重な話がありましたし、コロナに関して、皆さん日々大変なこと、不安もあると思ひますが、ぜひ一緒に乗り越えて、希望を持って、いい医療が提供できるようにということで、協力できればと思ひます。長時間、ありがとうございました。以上です。

司会：

ファシリテーターを務めてくださいました中谷さん、お疲れ様でした。長時間にわたり、ありがとうございました。本日ご発言いただきました貴重なご意見、またご提言、今後社会生活の中で活用していただけたらうれしいなと思ひます。

以上をもちまして、「with コロナ時代における献血のあり方」オンラインシンポジウムを終了させていただきます。本日のシンポジウムが、今後の暮らしを考えるきっかけとなれば幸いです。なお政府広報オンラインでは、with コロナ時代の各種政策の特集ページが開設されています。国と地域の皆さんが、暮らしに密着したさまざまなテーマのもと、一つのチームとなって前に進むための情報を発信しています。こちらもぜひご覧ください。本日はご視聴いただき、誠にありがとうございました。

以上